

江戸時代、疱瘡(痘瘡・天然痘)は一生のうち一度は経験せざるを得ない、いわば逃れようのない病として「お役」「お厄」とも呼ばれた。感染して平均12日間の潜伏期の後に、急な高熱・発疹、それがかさぶたとなり回復までに2～3週間かかる。致死率は20～50%と非常に高く、死を免れても「あばた」ができたり、失明することもある。そのため、「疱瘡は見目定め」といわれた。しかし、一度かかるとその後一生かからない。

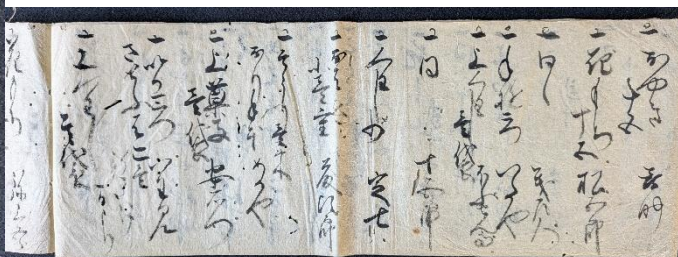
さて、網干区余子浜の加藤家の古文書に、文政十年(1827)三月の「松疱瘡見舞覚」、十三年(1830)十一月の「義蔵疱瘡見舞覚」(加藤隆文氏文書 姫路市立城内図書館史料整理担当所蔵)がある。これらの「見舞覚」は横帳になっており、疱瘡の見舞いで受け取った品々と贈り主と思われる人物等の名がそれぞれ40余り書かれている。見舞いの品は、松・義蔵とも菓子類が多い。(義蔵には、季節柄かみかんも多い。)めばる・いかといった海鮮類があるのはいかにも港町らしい。「松疱瘡見舞覚」には「一ツ 上くわし 壺袋 ほふせん寺」という文字も見え、加藤家の旦那寺である法専寺が上菓子を贈ったこともわかる。ちなみに、法専寺は義蔵にも上菓子を贈っている。「見舞覚」には人々の疱瘡感も垣間見える。贈り物には「小豆めし(あずきめし・あずきまゝ)」がある。赤い色には邪気を払う力があると考えられ、赤は魔除けの意味でよく用いられる。また、体表に生じる発疹の色は赤いもののほど軽い疱瘡と考えられ、小豆めしには、人々の疱瘡が軽くあってほしいという思いも込められている。そのほか「手遊」「からくり」とよばれた玩具もある。病人のまわりは玩具のほかにも、「疱瘡絵」や「疱瘡絵本」など赤で埋め尽くされたと言われているが、「見舞覚」に出てくる玩具が赤であったかどうかはこの史料ではわからない。

1980年 WHO は天然痘撲滅宣言をした。人力で消し去った伝染病は、今のところ天然痘だけである。一方で新たな伝染病も生まれる。2019年末以降、いわゆる「コロナ」で私たちの生活は一変した。過去の「病の記録」を掘り起こし、病と病を経験した人々について考えたいと思う。今回は、幕末～明治の網干における種痘について。 網干歴史講座会員 垣内 小林淳子
参考文献:鈴木則子『近世感染症の生活史』 酒井シズ『病が語る日本史』

香川雅信「疫病を遊ぶ一疱瘡神祭りと玩具」(『禍いの大衆文化 天災・疫病・怪異』)



「松疱瘡見舞覚」 (加藤隆文氏文書
姫路市立城内図書館史料整理担当所蔵)



網干余子浜・加藤家